

# 人々の〈生〉と「社会」との関係を問う社会学理論の可能性を考える

## 経験的研究からの理論化の困難を超える G.H.ミードの方法論

武蔵大学総合研究所研究員

徳久美生子

### 1. 目的

この報告の目的は、「人々の〈生〉と『社会』との関係を問う社会学理論」に、経験的研究を理論実践へとつなげる社会学理論の可能性があることを明らかにすることにある。

私たちは、今、探求すべき真実の構築性が指摘されながらも、対話による合意形成、共同性の構築といった社会学的価値観が通用しなくなった世界に直面している。その中で、「何をなすべきか・何をなそうかを問う理論実践が求められている」（西原 2010: 72）。

### 2. 方法

はじめに、2011年から広島市を中心に実施してきた原爆被爆者に対する聞き取り調査の分析結果を参考にして、経験的研究を理論実践へとつなげることがなぜ困難であるのか、その理由を考察する。そして困難を克服する道筋を、G.H.ミードの方法論と戦争・平和論への展開に見ていく。その上で、経験的研究からの理論実践の可能性が、ミードが提示した「人々の〈生〉と『社会』との関係を問う社会学理論」にあることを明らかにしていく。

### 3. 結果

原爆被爆者への聞き取り調査を分析した結果、調査の結果を分析する上で概念の説明や関係づけに理論を利用することはできることがわかった。理論には道具的な意味があった。だが経験的研究にあっては、研究者の恣意性やデータの取捨選択を回避し、語りの多様性を確保していくことが求められる。ところが経験的研究を「社会」概念の見直しへと通じるような理論実践へとつなげるためには、多様な事実を取捨選択し、研究者の思考を研ぎ澄まして理論の抽象化をはかる作業が必要となる。したがって、経験的研究を「社会」概念それ自体の見直しへと結びつけるような理論実践は困難である。

この困難を克服する道筋は、G.H.ミードが提言した、「人々の〈生〉と『社会』との関係を問う社会学理論」に見いだすことができる。ミードは、経験的データからは距離を取りつつも、社会関係が個人に及ぼす影響すなわち社会関係と個人との問題を掘り起こし、その問題を人の〈生〉の根源的なあり方へと立ち返って検討することで、解決の糸口を探求する知の方法論を提言した。そして戦争を、国家による共通の敵に対して団結する人々の敵対衝動の悪用という社会関係の問題と捉え、人が根源的に他者と敵対する存在であることを明らかにし、敵対衝動を利用されないための解決を、戦争がコミュニティの破壊と成員の生命の危機という共通の問題であることを認識する人々の行為に求めた。問題解決に向けたミードの提言をそのまま現代社会に当てはめることはできないが、ミードが実践した「人々の〈生〉と『社会』との関係を問う社会学理論」に経験的研究を超える理論実践の可能性を見ることはできる。

### 4. 結論

以上から、理論を道具とするのではなく、経験的研究の知見を道具として、人々の〈生〉と「社会」との関係にある根本的な問題を発見し、人々の生のあり方を根底から問い直すことで問題の解決を図る知の実践が、経験的研究を理論実践へとつなげていくひとつの可能性となることが明らかとなった。

### 参考文献

Mead.G.H., 1929, "National-Mindedness and International-Mindedness," *International Journal of Ethics*, 39: 392-407. (=2003, 加藤一己・宝月誠訳「国の精神化と国際社会の精神化」『G.H.ミードプラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房, 159-186.)

西原和久, 2010, 『間主観性の社会学理論』新泉社。